



『京都市児童福祉百年史』--編集・京都市児童福祉研究会・発行・京都市児童福祉センター・(一九九〇年十一月刊)--地方福祉史の検証として--

著者	小倉 襄二
雑誌名	評論・社会科学
号	41
ページ	79-89
発行年	1991-02-25
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002060

『京都市児童福祉百年史』

— 編集・京都市児童福祉研究会・発行・京都市児童福祉センター・（一九九〇年十一月刊）—

— 地方福祉史の検証として —

小 倉 襄 二

I

林屋辰三郎氏が『歌舞伎以前』（岩波新書）の序文のなかでわが国の歴史理解にとって、地方史、女性史、被差別部落史の領域を欠くことができないと指摘されたことがある。日本社会事業史の研究にとってもこの林田氏の指摘はあてはまるし、重要な研究上の指針というべきであろう。吉田久一氏による日本社会事業史研究はすでに時代区分のみならず社会事業研究の分野・範囲の劃定についても私たちが依拠すべき基本フレームの設定として考えるべきものであった。いわば『通史』としての研究基準がしめされている。これからの社会事業史研究はこの『通史』の基準に関連させながらそれぞれの『地方史』のレベルでの開發が必須

『京都市児童福祉百年史』

とされる状況にある。

『京都市児童福祉百年史』（京都市刊）は、ここでいう『地方史』とくに児童についての福祉の地域史としての位置をしめす力作である。日本社会事業の展開、とくに明治以降の展開には地方―主として自治体域としていくつかの検証すべき『スポット』がある。たとえば、岡山、大阪、東京などであるがそのなかでも本書がとりあげた京都市・府域は重要な発展と意味をもった地域である。本書によって地方の独自の展開を遂げた事実とその到達した制度、施設のかたち、それを支えた公・私の組織、人脈などを相当に刻明に迎えることが可能となっている。この地方史研究の枠ぐみのなかに京都地方、とくに京都市域を軸とする福祉史の経緯の解明が読みとられている。

『京都市児童福祉百年史』

本書は京都市児童福祉史研究会（会長、嶋津峯真氏）の共同研究三年余の成果として京都市により刊行された。構成としては五つの部門によって記述されている。第Ⅰ部は総論として百年史という設定についての時代区分、第一節、明治期前年―封建制からの脱皮、明治期後年―京都の近代化という区分、以下、大正期―慈善事業から社会事業へ、昭和初期、第二次大戦下、敗戦後、高度成長、現代へと八つの節に区分、第Ⅱ部としては、主として児童施策の種別ごとに『百年史』に沿ってその史的経過を記述している。各論として構成しその類別は各章ごとに一種別の事業を要約している。(1)養護、(2)児童教護、(3)母子福祉、(4)保育、(5)障害児福祉、(6)児童の健全育成の六項目にわたっている。第Ⅲ部は、本書のアクセントともいえるべき分野で「京都市児童院史」として京都市の児童行政の拠点として、本書の記述によれば、『京都市児童院』それは京都のみならず、日本の児童福祉の歴史の中で一つの金字塔である」の設立（一九三一年（昭六）九月一〇日開院）から現児童福祉センターに至るいわば施設史として要約されている。第Ⅳ部は主として『百年史』にかかわりをもつ京都市の旧社会課職員と児童院職員の『思い出』についての聞き書、座談の収録であり、資料の裏打ちともなる貴重な経験談である。第Ⅴ部において京都市児童福祉百年史年表、その関係資料が詳細にリストアップされていて児童福祉史の地方年表としては緻密、精細な内容をもりこんだ苦心の結実として評価できるものである。本書では、その論述に先立って明治期以降の貴重な写真、盲啞院開学

の碑文、児童院、隣保館、地方での定期刊行物、資料の写真などを多数収載している。

Ⅱ

本書の刊行に至る動機、経過については、編集後記に京都市児童福祉センター院長・勅使河原伯秀氏が述べているように『百年の節目』についてのさまざまな関係者の想いが聚って自然に児童福祉百年史の編集へとうごいていく経過が興味深い。研究会の会長の嶋津峯真氏（元児童院長）が京都聖嬰会開設百年を契機に同じやるなら児童百年でやったらどうかと発言し、話しあいの動き方が視えてくる。地方史にとっては、そのことに関心を持ちつづける人たち、それは地方史家とか研究者を意味しない。たとえば、フェミニズムの自己確認の試みのなかで自分史をもとめる動きがあるが、本書の成立についても、京都市の行政、とくに戦前からの関係者を含む世代をかざねた人脈、その関心と話しあいのネット・ワークのなかで本書をまとめあげるシステムが形成されたことはその内容との相関で注目すべき点である。京都市域における独自性ということもあるが、きわめて実践上の契機が強く、『現場無視』に陥り勝ちな福祉史研究にとって本書の成立のはこびは、『方法論』としても注目すべきものである。

本書には優れた意味での現場主義がある。それぞれの執筆者も教人をのぞいてほとんどが公・私いづれかの施設、機関、行政にかかわったり、民間の母子寮長とか、現に児童福祉施設のなかで

働く人々である。さきの自分史へのこだわりにも関連があるがこの節目で公・私の百年のあゆみを自らもかかわりつづける軌跡としてこの百年史のなかに集約しておきたいという同志的な希いのみごとな結実として本書を視ることができるといえる。

「総論（森田久男氏）では、児童福祉百年の起点に明治維新期における京都の初等教育、町組のとりくみ―市民による地域の「教育力」ともいえるべきものが動いていたことが指摘されている。領域別の項目をみていくと「養護」（近藤孝一氏）は施設史を軸にした経緯がまとめられていて十九世紀末からの京都聖嬰会（一八八六年）、平安徳義会（一八八九年）、平安養育院（一九〇五年）など現実に施設として機能している歴史の背景が語られている。

「児童教護」（加藤博史氏・松下裕氏）では、明治初期の懲戒―懲治、流民集所（るみんあつめしよ）窮民授産所などにはじまる日本的矯正院―労働場にはじまり、教護事業から京都感化保護院（一八八九年）による免囚保護、その後の少年への感化救済事業の開始、経過、大正期に入って少年法、矯正院法公布に伴う状況、少年保護施設について和教学園（一九二四年）、常盤学園（一九二五年）、吉水教園（一九二五年）、大照学園（一九二六年）などの詳細、とくに園部町の教護院淇陽学校（一九二二年十一月認可）の当時の実態などを簡潔にまとめあげている。少年教護委員は京都では一九三四年に導入されてその選任された人々の地域での職業や少年保護施設スタッフとの関係などの特色が説明されている。戦後の児童福祉、その教護、非行の地域状況へと戦後史

『京都市児童福祉百年史』

に記述が及んでいる。「母子福祉」（芹沢栄之氏）執筆者の芹沢氏は、山之内母子寮の寮長の責務を担っていて明治期の母子保護、捨子禁止、魔娼の関連、軍事救護、婦人解放運動と母子保護の「運動」として成立する条件、産児制限、昭和期の救護法の時代、母子寮、母子ホームの開設、一九三〇年代の信愛保育園母子の家希望寮の開設、戦時下の軍事援護と母子問題の関連のなかで平安寮（現山ノ内母子寮（一九四二年））の具体的状況、母子保護法（下の京都市域の母子寮や施行の状況も記述されている。戦後の敗戦と母子福祉、母子寮、その推移、母子福祉団体、市の就労など総合的施策へすすむ母子福祉行政、さらに助産の諸問題へも考察が及んでいる。「保育」（安藤和彦氏）の項は、草創期とくに幼稚園教育との相関、公・私立の幼稚園の増加、市民の熱意、京都市保育会（一八八九年）、ここでも軍事救護と保育のかかわりが指摘されている。いまでも京の保育は本山都市として仏教各派の経営が多いが、日蓮宗中村寛澄の京都私立子守学校（一九〇七年）の紹介もある。大正期以降は同志社を卒えた園部マキの信愛保育園（一九一四年）の事蹟、被差別部落、貧児保育を中心とする京都市の託児事業、昭和初期、戦時下の統後保育、さらに戦後の保育、保育団体、夜間保育、障害児保育、昼間里親など京都における保育の多様化の推移、保育従業者の問題、保育行政、今後の展望に至る集約がなされている。次の「障害児福祉」（中瀬惇氏）の項はこの百年史の論述にとって一つのキイポイントであり、京の先駆―開拓性を歴史的に照明する試みともいえる。さ

『京都市児童福祉百年史』

きの各項目のかさなりはあるが、ここでは先駆者として古河太四郎と盲啞院（一八七八年）、脇田良吉と白川学園（一九〇九年）、細井照道と大照学園（一九二六年）などの開拓者としての人物像と苦心の経営や軌跡が複雑する状況の推移を説明するなかで的確に語られている。この項目でも先人がその生涯を通して傾注した障害児福祉の歴史、そのあゆみの教訓が抽出されている。多様な障害児問題の現況との対比のなかで歴史からの発信として注目される。児童の「健全育成」（中根超信氏、藤江正昭氏）、健全育成はどうしても戦後期に焦点がかかるが、大日本帝国時代の健全育成という設定から下層社会、富国強兵、天皇制、教育勅諭の枠ぐみ、明治三〇年代以降の児童遊園、小公園の確保、大正期に入ってから児童相談、図書館、少年少女相談、とくに戦後の青少年問題、市の都市空間の児童公園問題、児童館、学童保育事業、児童委員、保健所行政、さらに子ども文庫、おもちゃライブラリー、ちびっ子広場、ユースサービス、京の伝統文化と健全育成の関係にも肌理こまかい記述がある。

本書の主軸ともいえるのは「京都市児童院史」（勅使河原伯秀氏）執筆者は現在、市児童福祉センター院長である。京都市児童院（一九三一年）の成立は、京都市の児童行政の起点であり、発信の基地でもあった。現在の児童福祉センターはこの児童院の敷地にあり、建物もその一部は児童院当時のものを改装して使用している。この項には児童院から児童福祉センターに至る詳細な児童院史年表が付せられて本文との照合によって、現在の総合一

系統性を重視する児童施策をすでに先取りして、今日にしてもなお斬新さを失なわぬこの児童院のシステム、機能の推移、変化が十分に読みとれる。児童院の運営の基調の七項目、母性・児童保護の社会事業機関、総合的有機的機能の發揮、組織的統制と連携、市域の全児童対策、むしろ異常児、罹病児に非らざる者を主眼、一般市民も対象、利用者の範囲は中流以下の市民である。いわば、福祉、保健、医療の連動システムの具現―拠点化の先駆モデルと称してもいいであろう。昭和恐慌を経て前フアンズム期の時代のなかで、理論面と実践面の準備期を経て児童院が成立したことの意味は大きい。当時の「市政の体質」も深くかかわっている（この点は後述）。

創設期から現、児童福祉センターに至るまでかかわりつづけた園原太郎京大文学部教授は若き日々を児童院囑託として京大の研究者と児童院の大学と現場の交流を維持する役割を担った。心理学の田寺篤雄氏をはじめ、園原教授を仲介として若い研究者が院のスタッフとして臨床にもかかわっていたことが紹介されている。これも現況よりも先進性があったといえないか。この項の年表などにも記載があるので私事にわたるが京都市児童福祉審議会（委員長小倉善二）に対して一九六八年一月に当時の京都市長富井清氏より「京都市児童福祉センターの建設について」の諮問があり、中間、最終答申を行った。専門部会を設定しさきの園原太郎氏、井垣章二氏、深瀬安氏、東出明氏らと児童福祉センターの構想を周到に検討した。私はとくに「センター行政」というバラ

タイムで自治体の福祉政策、行政の在り方を市役所の担当者と審議会の検討作業のなかで主張しつづけたことになる。その結晶が一九八二年一月に開所した現センターである。富井市政をひきついで船橋求己市長は民生局長の経験もあり、社会課気質（後述）、その感性に富んだ人柄で本書の年表のしめす推移のなかでセンター開設への努力をかさねた。私自身も直接になんとか児童院の名称を残せないかと市長と話しあったことがある。船橋市長だけでなく児童院を誇りに考え、名称にも愛惜を感じ市民も多い。児童院はその知名度の高さもふくめて子どもの教育、医療、福祉の結び目として市民が愛着をもっていることも百年史のこの項を読むときの留意すべき点であろう。児童福祉センターがこうした先人たちの傾注した巨大なエネルギー、実績を基盤とするごと、それに依拠して未来があることを本書は教えていると思う。

本書に先行する研究としては、第3部の資料欄にあげられているが、年表作製なり、資料の所在、事項の確認の手がかりになるのは府政百年の時に各領域にわたって編集された『府政百年史の年表』がある。とくに、その社会篇は本書の児童福祉百年史の項目とかさなり重要なガイド・ブックともなったようである。

たとえば地方史としては『岡山県下に於ける慈善救済史の研究』守屋茂著（岡山県社会事業史刊行会、一九五八年刊）が知られている。これは守屋茂氏が原著として編集されたものであって、本書のような共同研究、分拒執筆ではない。史観とか史眼という表現があつて原著としては該博な守屋茂氏の史観がたとえば石井

十次の岡山孤児院設立、濟世顧問制度の発足の地であり、留岡幸助、山室軍平などをうみだす明治期以降近代化の諸条件の前提としてさまざまな近代化に先行する培養基としての岡山の史実をたんにねんに収録されている。本書との対比はむづかしく時代の設定もことなるが本書ではここでいう史観とか史眼による百年史の系譜、その特性についてもとめることは困難である。各領域における事実の選択、その若干の評価にしても多様でやや散乱している。本書の全体からみて京都が明治維新の変動から、近代化のなかで、恒に児童福祉、とくに障害児への対応について先駆的な役割を担ってきたこと、よくいわれる保守的ムードのなかでも革新をもとめる市民のエトスがとくに児童への対応のなかに発現したことが確認されている。これは本書の随處で民間の施設のみならず京都市政の流れのなかに確認した歴史上の事実である。本書においてもこの先駆性の意味、開拓的な展開の根拠などについての論証を軸として論述の核―史眼が働いていれば、地方史としての筋道がさらに明確になったと思われる。

本書は、百年の歴史としての地域の児童福祉の通史という体裁になった。そのことから各領域ごとの論述は省略を余儀なくされた。時代ごとの論述のバランスも必ずしも適当とはいえない。分野によって資料の関係もあつて戦前―戦後と大きく区分しても不均衡、整合性を欠く項目も目立っている。とくに保育、母子、あるいは健全育成の項、総論の時代区分や状況の解説と各論の各分野の脈絡は必ずしもあきらかではない。本書としては、総論、各

『京都市児童福祉百年史』

論については執筆上の限界もあるので、3部以下で大きい分冊をしめる資料篇、とくに年表によってこの百年通史の基本資料としての役割をここに集約しようとする意図があり、そのことは成功している。本書の年表は、事項を編年的に追うなかで記述についてレイアウトに苦心があり、その時期を象徴的にしめすような新聞記事、冊子、カット類などを随処にくみこみ読む者が年表を活用するうえで資料効果をたかめる工夫がなされている。京都市の児童福祉通史の年表として完成度の高いものとなっている。さきの「児童院史」とくに、「思い出」の項目とあわせて全体の印象の散乱にもかかわらず、本書は一つの労作として日本社会事業史研究にとって貴重な業績となった。

III

本書がこうしたのはこびで完成することができた点についてのチーム・ワーク、それをまとめ推進した研究上のシステムについてもさきに触れたが、このシステム自体に一つの京都市政の脈絡と歴史が辿れる。それは決して、本書のためにのみ、仕上ったシステムではない。この研究システム自体が地方史研究の対象である。たとえば、戦前から京都市政では、「社会課気質（かたぎ）」とよばれるエトスが職員の間で語られてきた。市政のなかで、市政全体を問うときにもこの社会課気質という批評基準があったし、市のライン・スタッフの市政での人材、役割、考え方にも、いわば私のいう、社会課―福祉対応で市民を視る―私のいう、底

辺にむかう志。のような共通のしかも多様なエトスを語り継ぎ、大切に考える伝統のようなものがあつた。本書の「思い出」の項に出席している人々、さらに多くは故人となった市政のかかわった人々、本書の共同研究、市のスタッフとして本書の完成のために働いた人々、仮りにそうした人々の動機や自分史とかさねあわせた思考を尋ねてみると私はこの「社会課気質（かたぎ）」がいまだ減せず、の感がきわめてつよい。郷愁にも似てレトロ風のことではあるが本書がこうしたかたちで世にでるのは並々でない隘路をこえての関係者の努力、それを可能にしたものが大切である。いま、消滅しつつあるかみえて、なお、京都市政には本書のような仕事を市としてみとめ、完結させる余力があつた。関係者の見識をみとめる度量があつた。私はこれを社会課気質の系譜のなかにみいだしたいと思う。その意味でも本書は京都市政、京都市感にとって寔にふさわしい福祉を考える出版物として高く評価したいと考えている。

以下の部分には本書にも紹介されている「京都市社会課調査報告」についてのコメントである。京都市政と社会課気質、いまに至って熾火のように在るもの、本書の刊行を理解するうえで一つの背景として再掲した。

△さいきん、地域論とか、地域主義という視座によるテーマへの接近が注目されている。歴史研究における地方史の重視との相関もあるにちがいない。仮りに、わが国の近代、そのあゆみにしても、史的解明のためのフレームにはさまざまな組み方が先学によ

って考えられてきた。ここで考察する「京都市社会課調査報告」は、あらためて、地域主義や地方史重視の意味を私たちに鮮烈に問うものとして在るといえよう。とくに、この調査報告がその内実として扱っている分野は、わが国の社会問題史のもっとも重要なジャンルであり、その展開の時期を映すものでもある。

本調査報告は一九二四年（大正十三年）から一九四〇年（昭和十五年）の間に、京都市社会課によって調査刊行された報告書のシリーズである。それぞれの報告書には号数がつけられていて、一九四〇年九月刊行のものは、第四十八号となっている。このうち、十一点は、調査報告書として公表されなかった。

調査主体としての京都市社会課は、一九一八年（大正七年）の十二月に勸業課の一係として救済係を設置し、社会事業一般、社会事業施設、風俗改良などに関する事項を管掌したことに始まり、一九二〇年（大正九年）七月、市告示第三三七号によって「社会課」として新設されている。同年、一〇月八日の日出新聞の記事には、「本市社会課には未だ専任課長なく調査、経営両係を置く」と雖も予算僅少にて殆んど仕事をなすを得ず……之れ安藤市長が社会政策的施設の如き新思想的事業には理解と同情とを欠き之れが遂行に熱意なき結果に依るものなりとの批難少からざるが……特に施設の及ばざるは社会教化の方面にして、現に施設され居るは小売り市場の如き市宮住宅の如き職業紹介所の如き単に差し迫れる一部市民の窮迫を緩和するに止まり、何等根本的救済策改善策の一端だに指を染られ居らず市民の輿議は更に徹底的なる社会

政策的施設の遂行を要求し居る……」の指摘がある。

一九一八年（大正七年）の米騒動は、当時の社会問題状況の危機的集中表現として京都市域においても激しい様相を呈した。京大人文科学研究所の『米騒動の研究』にこの地域事情は詳細に記述されているが、米騒動による被起訴者数は三二六人（京都市一一人、乙訓郡六八人、綴喜郡三五人、加佐郡四七人、久世郡三五人、相楽郡一〇人など）に及んだ。この年の八月一日には、内貴甚三郎が京都市内の有力者一三〇余名が貧民救済について懇談、臨時救済団を組織、寄附金六四五、五九四円、米価割引券・施米券の配布などの動きがあった。治安規制と経済保護事業の創設（公設市場―北野・川端・七条・以上大正七年）開設、新町・壬生・正面（以上大正八年）。職業紹介所（大正八年六月一日、下京区寺町四条下ル大雲院山内にはじめて開設）、公益質屋、社会館、市宮住宅などの施策が、米騒動に集中された状況の緊迫に對して、京都市の行政責任や民間人の協力（京都共済会など）で対応を迫られていた。それぞれに当時の社会問題の状況に對して独自の役割と効果をもつものであったが、さきの日出新聞の記事にもその一端がうかがわれるが、社会問題状況の底の深さ、拡張への危惧、そうした予兆に對してその成果のふたしさが関係者による積極的な対応への摸索を始動させる主因であった。この中で、京都市社会課の創設と同じ年に、京都府に共同委員が設置されている。当時、京都府の大海原内務部長は、京都市の明治三十年頃よりの公同組合の制による『善隣の情誼』『公共の福利』の

『京都市児童福祉百年史』

実を生かして、この基盤に公同委員の制度（のちに大正十三年に方面委員と改称規程する）を設置することを強調している。公同（方面）委員は創始にたずさわった小河滋次郎のいう「査驗」——社会測量機関であり、公同委員の職務概要の第一にも生活困難の者あるを認める場合に先ず其の困憊の原因を調査し之が除去の方法を考究することをあげている。このことをふくめて、この時期、なにを描いても、米騒動を激発させ、貧困、労働、政治闘争へと運動する事態の実相の把握への気運がたかまったことは本調査報告の起点とその背景として重視する必要がある。大正十五年七月八日の日出新聞には、「社会測量とは、要するに社会の現状を構成する諸要素の店卸し、在荷調査を行ふのであり、提言すれば社会問題と社会的資源及び両者の相関状態の探究である。……社会測量は診断である。故に診断に基かない投薬の薄効なるが如く、社会測量に基かない社会事業乃至社会有機化事業の薄効なる明白である。……しかるに、現行社会事業を觀るに、そこによき基礎調査もなく、単に流行を追ふ社会事業、都市の面目としての社会事業、或は単に狂熱に依る社会事業もかなり多いのである。故に社会測量はこれ等の社会事業を矯正改善せむがためにもよき貢献をなしうるのである。」と述べている。

本調査報告の集約の開始は、大正期の中期から後段にかけての、京都市、大阪市、神戸市あるいは他の府県レベルをふくめて社会問題史上においていわば地域での「社会測量の時代」という状況の一つの開花として考えるべきであり、諸他のすぐれた自治

体レベルの社会調査とともに一つの時代の産みだした結果として考察すべきものといえるであろう。

京都市社会課のとりくんだ社会測量は、当時「特殊的社会測量」とよばれたものである。本調査報告は、調査報告番号（第一号）は、大正十三年十月の「常備労働者生活調査」から開始されているが、社会課創設以来、本調査報告の公刊に至るまでにも、それに先行する社会測量を継続していた。「扶養者なき老病者調査」「不就学児童数及びその職業調査」「不良少年少女に関する調査」「婦人団体の調査」「労働組合に関する調査」「細民地区実態調査」「木賃宿に関する調査」など三十余項にも及んでいる。

本調査報告はすでに述べたように、一九二四年（大正十三年）より一九四〇年（昭和十五年）にいたる間に調査報告書ナンバールとして四十八冊を刊行した。その調査項目は、それぞれのタイトルに明示されているが、大正から昭和期にかけての京都市域の社会問題の広汎かつ地域特性を反映した主題を的確に選択している。貧困者、職業婦人、同和問題、児童保護、日雇労働、工場労働者、住宅問題、環境改善、授産、職業紹介、医療保護、要救護問題、庶民金融、失業対策、消費組合、サラリーマン問題などの多岐にわたっている。大正期の米騒動から昭和恐慌、戦時体制への移行のなかで、京都市社会課の行政責任によって集約された本調査報告によって、すくなくとも、当時の行政上の問題意識、対象——主題の所在を明確に知ることができる。

なぜこのような行政責任による調査の統行が可能であったか。気運―社会測量の時代―状況そのものからの対応に迫られた必然性として説明できる部分もすくなくない。しかし一方で、いまに至るまで、『社会課気質』として京都市政のなかで、語りつがれている、社会課のスタッフのあざやかで、意欲的な主体性、その実践―調査能力の卓抜さをヌキにしては、この調査報告を語ることはできない。たとえば調査報告の第二号は「職業婦人に関する調査」であるが、これは、発表当時、いろんな期待、反響があったように、地元の日出新聞は、大正十五年の七月から一〇月にかけて七月は五回の連載、九月一回、十月には二回この調査について詳細な記事をのせている。たとえば、一〇月一八日の記事には「斯くして完全に出来あがった市社会課の職業婦人調査は全く担当者たる漆葉囑託と森書記が前後数旬にわたる苦心の結晶とも云ふべきもので、善かれ、悪しかれ自己一身に關した記事を或る程度まで曝け出すのであるから大概の女性として躊躇するのも決して無理からぬ事である。夫れを充分に納得させて、一々面倒な表に記入して報告させたのであるから並大抵ではない。最初先ず市内における主な銀行、会社、専売局、各電話局、病院、工場その他の組合等について雇傭の婦人数を調査してから少人数の処は依頼状を添付して郵送し多人数の処は一々持参して反覆説明を加へ職業婦人調査の根本趣旨を論じた上、幹部の斡旋をまつて本人の諒解を求め……」とその苦心のかたちを紹介し、この結果をもととして、雇傭、保健、収入、勤務時間、福利施設、思想問題、

『京都市児童福祉百年史』

婦人専門の職業紹介所設置、クラブ、宿泊所の設置に至る対策への期待を表明している。調査報告の調査への接近、そのデザインも周到であつて、自由回答もくわえて、統計数値のみならず、当時の職業婦人の生活・意識の生動した断面が浮上するような工夫が成功している。調査報告、第三号、第四号の「商工徒弟に関する調査」とあわせて、職業婦人や徒弟の選別の範囲に京都市域の特性が反映しているが、こうした周到な調査過程、そのすぐれた集約によって、当時の職業婦人問題、徒弟問題の解明にとつて本調査報告はきわめて重要な研究資料という位置をしめしているのである。

失業対策、失業問題として昭和恐慌期の後段には調査報告第十六号の「日傭労働者に関する調査」があるが、資本主義経済と産業予備軍の累加としてその社会問題としての位置をとらえ、失業問題と日傭問題の相関を、悲惨と、危機として考察し、恐慌の襲来と共に其の第一線に曝され、不況の深刻化、持続は逆に彼等に生存をすら拒否しやうとしている」と調査の必然性と切実さを訴えている。さらに本調査報告のすべてにはほ共通するのであるが、調査のための調査ではなくて、この場合も労働紹介所の建設のための計画のためという政策目的との相関が明示されている。

調査報告第四十三号は「京都市に於けるカード階級医療状況調査」であるが市内一、七四八世帯のカード階級（要救護貧困世帯）を十日ごと、あるいは、疾病の慢性化の世帯には一ヶ月ごと

に調査員が訪問して、延七、五一七世帯を、実証的ケース・ワーカー調査」として一年近くの日時を費して精査し、静態・動態の両面にわたって鋭く、的確な実証データをくみあげている。

全てにわたって調査報告が「成功」とはいいがたいが、徹底した調査アプローチが多い。日備調査でも、係員が労働現場に向向して、質問し、相当の長時間を一人一人の日備労働者の対話としてカードに記入していった。雇用者側の無理解や時間の制限に苦しみながら主題に接近していて、通常の調査基本項目のみならず、衣・食・住の具体的なくらしの流れがわかるように、木賃宿、食堂の献立にいたるまで目をくはっている。それぞれに問題発見への意欲とはなにか、社会的正義、ヒューマンな共感でみていくことができる魅力がこれら一れんの調査報告にはあると思う。

本調査報告の復刻出版の意味はいろんな角度から考えられていく。とにかく、大正末―昭和初期にかけての自治体としての京都市（社会課）が行政責任として接近したユニクな社会問題資料であり史的データである。京都の市政史としての一定の評価、幻の資料としての評価、あるいは百年史の記述にもある先人の鮮烈な業績への郷愁、憧憬に近いものもないまじりながら本調査報告について語られることも多い。

調査報告の骨組みが社会科学のしっかりしていること。特定項目の報告、その分析には、あきらかにマルクス経済学の貧困化論や相対的過剰人口論による論証が緻密にくみこまれている。検閲や特高警察の干渉が社会課の仕事への権力干渉としてあったこ

と。検束・拘置されたスタッフのあったことも、この調査報告の内実を理解するうえに大切な事実である。京都市政のなかで、伝説、めいて語られ、本調査報告持続にとって、その概要におられた社会課長としての故漆葉見龍氏の見識と統括力、あるいは、しごきに近い課員に対する指導性、自由で知的、ヒューマンな課の当時の雰囲気などもこうした調査報告をうみだした起動力であったらう。昭和恐慌期のインテリゲンチアの失業問題のなかで、

課の調査能力は、大卒者はじめ、知識階級の失業対策として、あるいは、過少所得者の救済策として調査スタッフとして新進気鋭の調査担当者を社会課としてつねに相当数確保していたこと。これらのスタッフを日常的に強い個性と峻烈な問題意識で鍛えた漆葉見龍氏とその協力のリーダーシップやコミュニケーションをスキにしては本調査報告を語ることはできないであらう。私自身もいくたびか漆葉見龍氏からこうした当時の社会課の情景を伺ったことがある。社会学の造詣の深い漆葉氏は、分厚い社会学の原書などを一週間の期限つきで課員によくこなすことを求めそこから調査の項目や方法を設定するように強い指示をするなどあたりまえというところで、毒舌、シゴキ、叱咤も相当なものであったらしい。漆葉氏自身が自認されたこともある。漆葉氏は治安維持法違反容疑で検束されることになるが吏僚としてのエトス、当時の庁内の状況と重ねあわせると本調査報告の成立の独自の偶然と必然のからみあった意義も視えてくるのではないか。

一九三五年（昭和十年）六月に社会課は保護係、福利係、職業

係、ついで庶務係もついて、体制の整備をはかっているが、当時の社会課のスタッフが戦中、戦後にかけて、京都市政の中枢、重責を担うことになるのである。戦後にも、この社会課の人脈がひきつがれて、現に、そのOBによって「社友会」というグループも健在である。V

本調査報告は、とにかく、京都市政の「体質」であり、漆葉見龍氏自身が、一九四〇年に検束をうけて一切の資料を奪われていたり、市の資料管理の不備もあって、入手可能なものの完全複製であるが若干の不安が残っている。未公表、謄写刷部内資料としてあったものについても探索したがついにみいだせなかつたものもある。児童福祉百年史公刊につづいて今後にも蒐集整理への努力を続ける必要がある。

社会問題―福祉主題について、あらためて自治体―地方分権による対応の重要性が問われている。本調査報告は、京都市政のなかで市の職員責任として苛烈な課題に切りむすんだ一つの軌跡を語っている。今日の事態、市民と自治体とのあいだ、その問い、あるいは「行政体質」といわれるものなかに、この調査報告の復刻の意味があらためて確認されていないのではないか。私はこの調査報告の集約に志をたてた人々が凝視し、確証しようとした現実、その方法、意図、責務へのエトスなど、自治体のいまなすべきことへの自省とも深い意味連関があることを考えていきたい。

さらにこの復刻の作業のなかで私は自治体における資料保存と整備の必要性を痛感した。社会問題史研究における自治体資料の

重要性をもあらためて「京都市社会課調査報告」は提示しているといえよう。

この報告書シリーズは『京都市社会課調査報告』（十分冊・文京出版、一九七八年七月刊、復刻編集責任、小倉襄二）として刊行された。当時故船橋求己市長をはじめどこかに社会課気質を感じさせる市のスタッフの方々に協力をうけたものである。

百年史の項目執筆者としての安藤和彦・加藤博史両氏も散逸して蒐集のむつかしい原本を整理に参加した。この児童福祉百年史のなかで児童院の開設をはさむ大正末から昭和初期―中期にかけての京都市の行政としての姿勢と市民生活の状況をしめすものとしてこの報告書はかさねあわすことができる。

また私自身も京都市児童福祉審議会、社会福祉審議会のメンバーとして本書のとくに戦後の京都市の福祉行政施策にかかわり市のスタッフとの共同作業の場をもつことができた。その体験的なものも本書の評価についてかわりがある。本書はA版六四五頁の大冊であり、福祉行政の各分野に自治体の責務が重くなりつつ今日、いろいろな意味で本書の刊行の意義はきわめて大きい。

(1991. 2. 1)